写真1　瓦鳩置物　金重陶陽作　個人蔵

写真2　瓦鳩置物　金重陶陽作　瓦部胴の表面

写真3　瓦鳩置物　金重陶陽作　瓦部内面

備前焼 瓦鳩置物　金重陶陽作
――作者と注文者の関係を知る一事例――

重根弘和

はじめに

「備前焼 瓦鳩置物」は、近年、岡山県立博物館（以下、博物館）に寄託された金重陶陽（一八九六～一九六七）の作品である。博物館では平常展において、細工物と呼ばれる置物や香炉などを特集するときに展示したこともあるが、所蔵者によって大切に保管されていたこともあり、展覧会図録や作品集などで紹介されたことはなかった。備前焼の細工物として優れた作品であると同時に、作者と制作時期、さらには発注者と注文理由までわかる貴重な作品であるため、ここで紹介する。

一　作品について（写真1）

計測値

高さ　二七・一㎝

最大幅　三六・三㎝

奥行　二〇・四㎝

重さ　二、七五一g

箱書（写真4）

蓋表　備前窯／瓦鳩置物

蓋裏　昭和甲戌師走／金重陶陽作／方印（金重）（陶陽）

所見

軒丸瓦に二羽の鳩がとまる姿を表した備前焼の置物である。一羽は瓦当の上端に足を掛けて左を向き、遠方を眺めるようにやや顔を上げる（写真5上）。もう一羽は玉縁の前にとまり、首を左に傾けてまっすぐ前方を見つめる（写真5下）。それぞ

写真4　箱書

写真5　2羽の鳩

写真６　たまご形の胴

写真７　羽の表現

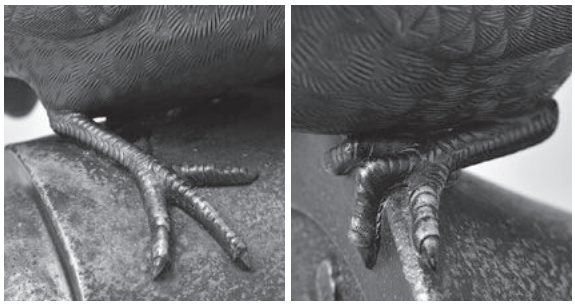

写真８　足の表現

れ胴は丸くふくらんだたまご形となり、包み込むように羽を添わせる（写真６）。その胴からは尾羽が扇形にのびる。羽の部分には規則正しく線を刻み、羽毛の質感を表現する（写真７）。足と爪については線を刻むだけではなく、段差をつけることで立体的に表現する（写真８）。

瓦当文は桐文である（写真９）。花の数は中央が五、両横が三となる、いわゆる五三の桐で、羽柴秀吉（一五三七～一五九八）が家紋に使用したことで知られる。瓦の表面は全体を平滑に仕上げ、胴の外面には縦方向、内面には横方向に撫でた痕が筋状に残る（写真２・３）。内面の中央付近に「甲戌秋日／陶陽作」とヘラで刻まれており（写真10）、箱の墨書と併せて見ると、昭和九年（一九三四）の秋に成形が終わり、その後に焼成が行われ、一二月に完成したことがわかる。

写真９　瓦当

写真10　内面の文字

二羽の鳩と瓦は一体となっており、箱に収納するときも分割できない。それぞれ成形した後、組み合わせた状態で焼成されている。作品の上面には灰が降りかかって溶着し、黄土色に発色する。このように溶着した灰を、地元ではゴマと呼ぶ。鳩の上面にかかったゴマは膜を張るように広がるのに対し、瓦のゴマは点状に付着する。

焼成後、作品の全面に何かを塗った痕がある（写真2・3）。明治時代から昭和時代初期の備前焼には窯変がなく、茶色一色のものが多かったことから、「はや漆」と呼ばれるニスのような薬品をよく塗っていたと伝わる（桂一九七六）。おそらく、この作品にも同じことが行われている。

二　金重陶陽

明治二九年（一八九六）、備前焼窯元六姓の一つ、金重家に陶陽は生まれる。本名は勇。父は細工物の名工として知られる槇三郎（雅号「楳陽」）。五歳の頃からやきものに興味を持ち、土いじりをはじめる。一四歳のときに伊部尋常高等小学校高等科を卒業し、父楳楊について作陶をはじめる。二二歳の頃から「陶陽」の号を用いるようになった。

細工物を得意とする「でこ師」であった陶陽だが、三六歳になる昭和七年（一九三二）頃から本格的にロクロを使用し、制作の中心を細工物から茶道具へと移す。陶陽が茶道具に注目した理由については、時代背景のほか、自身が茶道を習い始めた、細工物よりも効率良く収入が得られる作品を作りたかったなど、様々な要因があったと伝えられる。以後、川喜田半泥子、荒川豊蔵、一三代三輪休雪、北大路魯山人、イサム・ノグチらと交流し、数々の作品を発表する。そして、昭和三一年（一九五六）、六〇歳のとき、備前焼の技術により重要無形文化財技術保持者に認定される（岡山県立美術館一九九六）。昭和時代前期まで不況にあえいでいた備前焼に興隆をもたらした功績は大きいとされ、備前焼中興の祖とも呼ばれる。

三　制作の経緯

備前市浦伊部の来住家当主が、当時親しくしていた金重陶陽に備前焼を注文するとき、瀬戸内市牛窓町の親戚に、どういったものが欲しいかを尋ねた。その親戚が、自分が来住家から嫁いだことを示すものが欲しいと答えたところ、この作品が制作された。

天正一〇年（一五八二）、当時の来住家当主、法悦（〜一六〇九）は、毛利氏を攻めるため兵を率いてきた羽柴秀吉を、浦伊部の自宅へと招く約束をする。法悦が秀吉を応対する客殿と門を新築し、接待の準備を進めていたところ、明智光秀（〜一五八二）が織田信長（一五三四〜一五八二）を討つという本能寺の変が起こる。結果、秀吉は来住家に立ち寄ることなく、急ぎ京都まで戻ることになるが、そのときに新築した門は後に太閤門と称され、現代まで伝わる。

瓦当に刻まれた五三の桐は、この伝承に基づく。陶陽は秀吉の家紋を刻むことで、来住家ゆかりの作品であることを示し、注文者の希望に応えた。

なお、門については、「伝太閤門跡」として、平成六年（一九九四）に備前市の指定史跡となる。

陶陽が制作した瓦鳩の置物は、この他にもいくつか知られるが、鳩は一羽のものが多く、二羽のものは珍しい。本作は結婚のお祝いとして制作されたと伝わるため、瓦で羽を休める二羽の鳩は、夫婦の姿を表している可能性がある。

陶陽自身はこの作品について、「快心の出来」と語ったと伝わる。

おわりに

制作の経緯は、所蔵者からの聞き取りに基づく。その内容から判断する限り、「瓦鳩置物」は特別な注文品と言える。注文者は家族の結婚祝を作ろうと考えた。同時に、経済的に厳しい状況にある親しい作家を支援したいという意図もあったかもしれない。この作品が制作された昭和時代初期は、備前焼を求める人は少なくなっており、作家は非常に苦労していたと伝わる。そうした環境の中、注文を受けた作者は自分の作風を活かした上で、注文者の希望を満たす作品を作った。そして、作品は現在まで大切に伝えられてきた。

後にまで大切に伝えられる作品は、注文者の希望に沿って制作された稀少品が多いが、大量生産品から選ばれている場合もある。いずれにしても、それを良いと思う価値観を共有する人が後に続かなければ、伝えられることはない。価値観を共有するためには、作品にまつわる情報も非常に重要となる。そのように考え、ここでは、作品を収める箱の墨書を含め、制作の経緯や注文者の意図、そして、注文を受けて制作した作者、さらには当時の社会状況まで紹介した。

作品を鑑賞するとき、なるべく先入観なく作品と向き合うほうが望ましいと思うが、それは難しいことでもある。作品と出会う前にどうしても何らかの情報は得てしまう。どんな箱に入っているかを知るだけでも印象は変わるだろうし、誰が見せてくれたものか、どこに置いてあるのかということによっても作品の見え方は異なる。それまでの経験から受ける影響も大きい。自身がどのような情報に影響を受けているかを明示しておくことも重要である。

作品の所蔵者および関係者のご高配により、貴重な作品の調査を行う機会に恵まれました。成果を本稿にまとめるにあたっては、多くの方の援助を受けました。文末ではありますが、この場をおかりして、ご協力いただいたみなさまに、お礼申しあげます。

《参考文献》

岡山県立美術館『特別展　金重陶陽―生誕一〇〇年記念―』一九九六年
桂又三郎『明治の備前焼』奥山書店　一九七六年